

ファフロディンに関する初歩的考察  
— 『スリ・ディポネゴロ』 のオランダ語摘要 (IPO) を手がかりとして —  
A Preliminary Study on Fachrodin:  
Based on the Dutch Summaries of *Sri Diponegoro* Provided in *Overzicht van de  
Inlandsche Pers*

小林寧子 (南山大学)

KOBAYASHI Yasuko (Nanzan University)

ムハマディヤ設立者のアフマド・ダフランの没後 1923 年に筆頭副会長となったファフロディン (1884/89/90~1929) は、ジョクジャカルタの小さな団体に過ぎなかったムハマディヤを全国組織に発展させた。植民地期の民族主義運動やイスラーム運動に関する文献ではファフロディンの名はよく登場するが、その人物像についてはまだ明らかにされていない。1916 年のムハマディヤ名簿ではファフロディンは自らを「ジャーナリスト」と記している。自らも、スラットカバル (新聞・雑誌) こそが自分をよく表現できる場だと語っていた。そこで、本報告ではファフロディンを知る第一歩として、彼が最初に編集発行したマレー語週刊誌『スリ・ディポネゴロ (*Sri Diponegoro*)』(1918-1919) に掲載されたそのコラムを検討する。*Sri Diponegoro* の原本はすでにないが、植民地文書 *Overzicht van de Inlandsche Pers* (IPO, 原住民報道摘要) を使用する。

ファフロディンのコラムには第一次世界大戦終了前後のジョクジャカルタ周辺の草の根の人々の苦境が描かれている。取り上げたのは、疫病撲滅局とカウマン (大モスク周辺の宗教色の強い集落) 住民とのトラブル、貧困者救済事業をめぐる問題、砂糖農園に対峙する農民の問題である。ファフロディンはブディ・ウトモやイスラーム同盟の会員でもあり、その活動を通して考えたことを叙述している。どのようにしたらクロモ (弱い立場にある民衆) をこの苦境から解放できるのか、ブミプトラ (土地の子、インドネシア人) の運動体に求められるのは何かに考えをめぐらせた。ファフロディンは報道法違反で摘発されて編集から降りた。しかし、この若い日々培った現場主義、実践主義はのちのムハマディヤの運動の体系化、組織構築に活かされることになったと考えられる。